



## 紙とインキでやりたかったことは……

高井 薫

薄い薄い色なのに鮮やかにみえる。

薄い薄い印刷なのに奥行きがある。

ちょっと不思議な色彩のなかに垣間見えるのは、  
幾重にも折り重なった多層的世界。

## ABOUT TRIAL

トライアルについて

### ●トライアルの背景

出発点になったのは「きれいな色のインキがほしい」という思いでした。カラーコピーでラフをつくると、意外に発色がいいでしょう？ いい感じだなと思って印刷に入ると、なんだか濁ってみえてしまってガッカリすることがわりとあるんです。特に草や木のグリーンや、薄い色調のときにそう思うことが多いですね。印刷されたものの質感も、4色に分解して網点で色を再現するというシステムも気に入っている私としては、印刷物がカラーコピーよりもよくならないと感じてしまうことが、ちょっと不満、というか悲しかったんです。プロセス4色のインキをつくりかえて、もっと違う発色のインキをつくってほしいとお願いしてみたいなとずっと考えていたくらいです。

そんなふうには思うのは、たぶん私がふだんからノーマルの4色で仕事をする人が多いからかもしれません。捕色を1版足すとか、特色で色や調子を整えるとかはあまりせずに、普通の4色だけで完璧に仕上げるのが好きで、だからよけいにインキの色がよくなったほうがいいと強く感じるのだと思います。

### ●トライアルの経過

実は今回、トライアルしていたことはふたつあったんです。ひとつは「紙の質を変えること」でした。以前からパッチワークのようにさまざまな紙質をもった紙が欲しかったので、ニスやホホワイト、メジウムやシルバーを使って1枚の紙のなかに印刷でたくさんの紙質をつくるのを最初のトライアルにしました。

次に挑戦したのが「薄い色のインキ」です。普通にカラー分解した版を、パールやメジウムで薄めたイン

キを使って何枚も重ね刷りするトライアルです。すると想像以上に面白い絵柄ができることがわかったので、これを中心にしてポスターをつくらうと決めました。質感を変えた紙の上に、薄い色の絵柄が何層にも重なっている、そんな作品にしようと思ったんです。

ところが大詰めになって、このふたつの要素を合体させてみたらビックリ！ 最初につくった質感が、上に重ねた4版×3絵柄の合計12版のインキの強さで消えてしまったんです。もちろん微妙な質感は残っているのですが、このくらいならある程度ニスでもできるかなと思えるくらいに弱まってしまった。最初のトライアルではわからなかったのですが、ほんとに驚きの体験でした。この結果を踏まえて、今回のポスターでは薄い色に絞って制作することに決めました。

### ●制作コンセプト

薄い色のインキで印刷した絵柄を何回か重ねていきます。インキが薄いからできる重ね刷りです。版が重なって突然見えてくる絵柄の面白さをシンプルに、気持ちいいと思ってもらえるようなものにと考えました。

マスク版の原画は、以前につくった「絵FONT」という、言葉を絵に置き換える作品に使用したイラストです。それとトライアルでもモチーフに使っていたドクロをプラス。UFOは私の個人的な趣味で追加しました。今回は重ねるというシステムがわかりやすいよう、版の組み合わせの変化でいろいろな絵柄ができあがるような仕組みを考えました。マスク版でそれぞれ写真を切り抜きにして重ねていきます。切り抜いた植物の写真は、通常の印刷では再現が難しい緑の色調。単体で見ればとても気持ちいい風景なのです。

——高井 薫

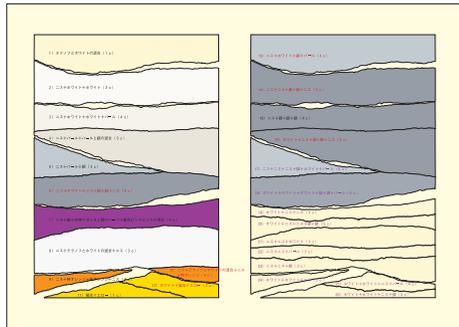
# TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

高井 薫 × 高本晃宏 (PD)

## 1枚の紙に いろいろな紙質をつくる

1枚の紙の上に、インキでどのくらいの紙質をつくらることができるかを試してみたいという要望。紙質はガサガサ、ピカピカ、ツルツル、パール質感のもの、色は白や蛍光色のものなど。これだけバラバラな質感だが、果たして実現は可能なのだろうか。



全部で26種類のインキの組み合わせが書き込まれたレイアウト指定紙



高井氏が作成した紙質の指定紙。いろいろな質感の紙を貼り付けてある



パール調の部分。版の構成は左の帯から、防水用ニス（ホワイト混入）、グロスニス→ホワイト（2度）、グロスニス→ホワイト（2度）→パール、グロスニス→パール→パール（銀混入）、グロスニス→パール→銀\*。用紙はルーセンスS（下2段も同様）、この他にGAバガス、上質紙、アート紙でも試した



色の部分。版の構成は左の帯から、ホワイト→蛍光イエロー、グロスニス→防水用ニス（ホワイト混入）→グロスニス→特色オレンジ、グロスニス→防水用ニス（ホワイト混入）→グロスニス、グロスニス→銀\*→特色マゼンタ（銀混入）→蛍光ピンク（グロスニス混入）



銀の部分。版の構成は左の帯から、ホワイト（3度）→銀\*（2度）→パール、グロスニス（3度）→銀→ホワイト→パール、ホワイト→グロスニス→銀→銀\*→グロスニス（2度）、グロスニス→銀→銀\*（2度）、グロスニス（2度）→銀→銀\*→グロスニス、グロスニス→ホワイト→銀→パール

\* 銀紙のような質感をインキでつくるため、今回は調色可能なノンリーフィング蒸着アルミ顔料を用いた「TOPSTAR 06 2007」を部分的に使用した

# TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

高井 薫 × 高本晃宏 (PD)

## 薄色のインキで 絵柄を刷り重ねてみる

通常のプロセス4色で薄い色を表現しようとすると網点が小さくなり深みが出ない。そこでインキそのものを薄くして実験してみた。さらに、3種類の絵柄を用意して重ね刷りにも挑戦。3つの絵柄が重なって予測できない絵柄が出現することも期待して……。



### 原稿

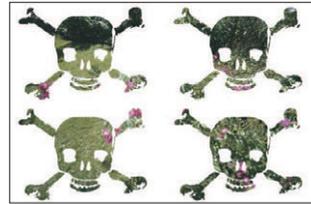
3種類の原稿をノーマル分解。ただし極薄のインキで刷るため、中間部のボリュームを上げてしっかりと階調再現ができるよう調整した



原稿 A



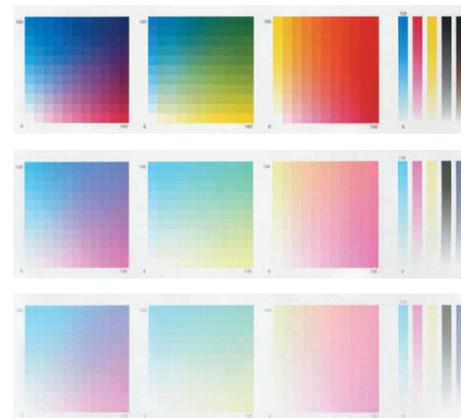
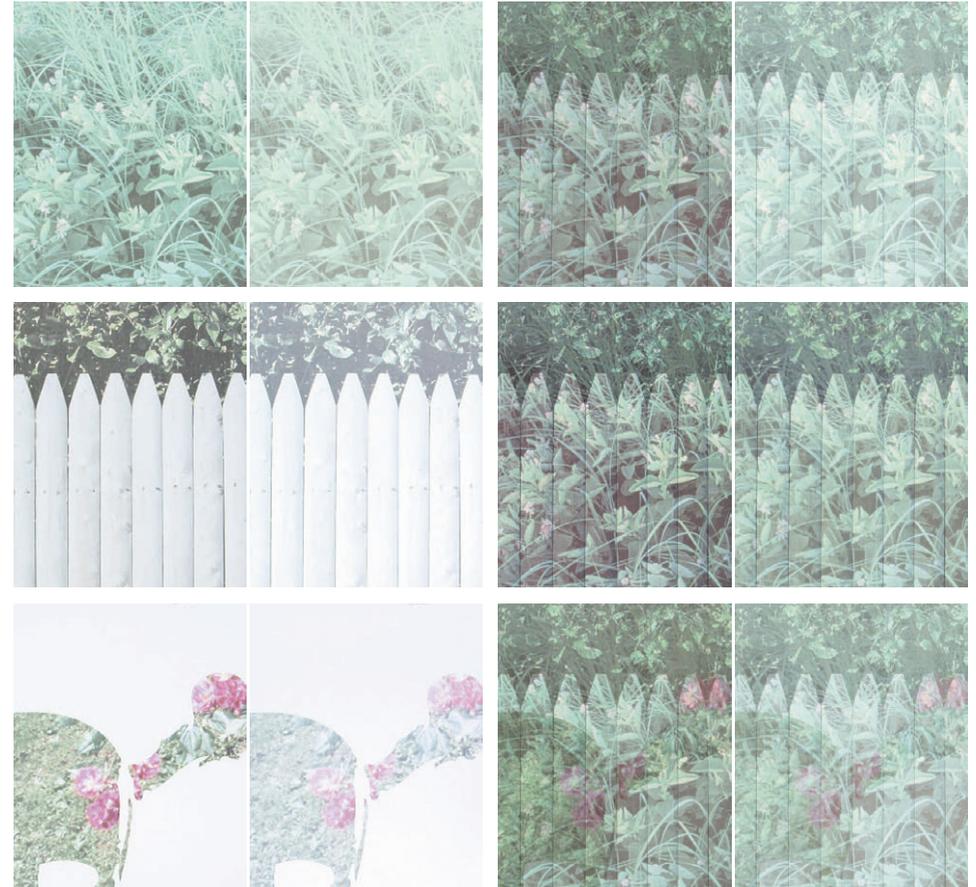
原稿 B



原稿 C

インキは、薄い色でも色感豊かな表情を期待して広演色プロセスインキ「Kaleido」を選択し、グロスニスで濃度約6%に希釈したものと、濃度約3%に希釈したものの2種類をそれぞれ試した。さらに3種類の原稿を重ね刷りして、透過性やインキの厚みによる効果を確認した

版の構成 (3種類の原稿を重ねた場合) : 【原稿 A】プロセス4色 (ただし「Kaleido」を希釈したもの) / 原稿 B、Cも同様 → 【原稿 B】 → 【原稿 C】



原稿 A	原稿 A+B		
原稿 B	原稿 A+A+B+B		
原稿 C	原稿 A+B+C		
濃度約6%	濃度約3%	濃度約6%	濃度約3%

左はテストで使用したインキの掛け合わせチャート。上から、比較のために使用したノーマルのプロセスインキ、広演色プロセスインキ「Kaleido」を濃度約6%に希釈したもの、同じく「Kaleido」を濃度約3%に希釈したものと

## AFTER TRIAL

トライアルを終えて

### ●トライアルを終えて

これだけインキが薄いので、ひとつの絵柄を刷っただけだと少し見えにくいらいなんです。それがひとつ、ふたつと絵柄を重ねていくと、突然、鮮やかに絵柄が浮き上がって見えてくる。もしかしたらそうなるかな、と予想はしていたものの、ほんとにできたのは嬉しかったですね。それにしても、インキは相当薄めても、なかなか薄まらないのには驚きました。

今回は3回重ね刷りをしたし難易度も高いので、実際の仕事で同じことはなかなかできないでしょうね。でも、インキを何%かに薄めて普通の4色機で1回刷るだけだったら、できそうな気がします。1回だけでも十分に新しいものに見えるので、これからぜひ実践できる機会を見つけてやってみたいと思っています。

私はふだんから、プリンティングディレクターさんには絶対いて欲しいほうなんです。自分の言葉が製版する現場の方にちゃんと伝わるのが重要ですし、1%きざみのニュアンスを仕上がりに反映したいので、いてもらわないと困ります。言葉を翻訳してくれる人、という感覚ですね。

高本さんとはもちろん今回が初めてで、やりたいことの仕組みやコンセプトは私が考えましたが、どういうふうにすれば実現できるかという部分は高本さんにほぼおまかせしていました。スパーンと投げたら、何週間後かにちゃんと印刷物になってスパーンと戻ってくる。打てば響くような感じで気持ちよかったですね。

そういえば、このトライアルのスタート時に「印刷の限界に挑戦してみたい」と言った記憶があります。確かに、終わってみるとそんな感じのトライアルになったような気がします。

——高井 薫



### ●プリンティングディレクターから

最初に目指すラインの設定ができていたので、あとはざっくりとイメージを確認しながら進むという、かなり効率的な展開ができたのではないかと思います。データだけは綿密に取ったので、それも後々役に立ちました。

今回は大量生産をしないのが前提でできること、トライアルという目的が明確だったので、僕としては通常の仕事ではやらないような方法を徹底的に試みようと考えて印刷方法を設計していきました。普通の4色ではないやり方や、いつもなら使わないような材料を、一般的な制約にとらわれずに組み立てました。

実際にやってみないと、心から納得することってなかなかできないものですよ。せっかくのこういう機会ですから、日ごろから高井さんの心に引っかかっていた印刷に対しての「？」な部分を解消できればと考えました。実際、薄い色のトライアルはかなりイメージどおりの成果を得られたようでしたが、逆に質感をつくるトライアルではオフセット印刷で可能な限界も感じてくれたのではないかと思います。

——高本晃宏



用紙：ヴァンヌーボV / スノーホワイト 四六判 135kg

版の構成：プロセス4色（ただし「Kaleido」をグロスニスで濃度約4%に希釈したもの/以下同様）→プロセス4色→プロセス4色



用紙：ヴァンヌーボ V / スノーホワイト 四六判 135kg  
 版の構成：プロセス4色（ただし「Kaleido」をグロスニスで濃度約4%に希釈したもの／以下同様）→プロセス4色→プロセス4色



用紙：ヴァンヌーボ V / スノーホワイト 四六判 135kg  
 版の構成：プロセス4色（ただし「Kaleido」をグロスニスで濃度約4%に希釈したもの／以下同様）→プロセス4色→プロセス4色



用紙：ヴァンヌーボ V / スノーホワイト 四六判 135kg  
 版の構成：プロセス4色（ただし「Kaleido」をグロスニスで濃度約4%に希釈したもの／以下同様）→プロセス4色→プロセス4色



用紙：ヴァンヌーボ V / スノーホワイト 四六判 135kg  
 版の構成：プロセス4色（ただし「Kaleido」をグロスニスで濃度約4%に希釈したもの／以下同様）→プロセス4色→プロセス4色

# FINISH

全作品と原稿



## 原稿



原稿 A

原稿 B

原稿 C

原稿 D

原稿 E

原稿 F

それぞれの作品は、左の6種類の原稿から3種類を組み合わせてできている。ただし、インキは「Kaleido」をグロスニスで濃度約4%に希釈したものを使用し、ひとつの作品は、【原稿3種類×4色=12色】となっている



A+B+C

A+C+D

C+D+E

A+D+F

B+E+F